（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和　４年　３月　31 日

県立城郷高等学校長

○令和３年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和　年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 10 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①新学習指導要領への移行と、インクルーシブ教育実践推進校としての取り組みを主軸に、系統的な教育課程を構築する。 ②「主体的・対話的な深い学び」を追求した授業実践を組織的に積み重ね、「自ら学び続ける生徒」を育てる。	①新学習指導要領についての理解を深め、新教育課程確定に活かすとともに、教育実践に反映させる。また、コロナ禍における学習活動について検討・検証する。 ②「公共」の研究や ICT を生かした全教科の授業改善と、「総合的な探究の時間」の実践により、自ら学び続ける生徒を育てる。	①新学習指導要領についての研修機会の設定、新教育課程の確定、授業実践への反映を行う、等。オンライン授業の試行に取り組む。 ②「公共」の年間指導計画の確立、ICT 活用や公開授業研究等による組織的な授業改善、「総合的な探究の時間」の計画・実践を行う、等。	①社会とのつながりや幅広い視点を意識して授業研究に取り組んだか。 ②「公共」「総合的な探究の時間」の年間指導計画を確立・実践できたか。全教員が ICT 活用や公開授業研究等を通して、主体的・対話的な深い学びにつながる授業改善ができたか。	①新学習指導要領の外部研修への参加等により、新たな知見を得ることができた。 ・オンライン授業研修会を実施、ICT サポート教員の配置等、TT でのオンライン授業を行った。 ②「公共」の年間指導計画を確立。事業の最終年度にあたり、研究成果をまとめ発表会を行った。 ・ICT 利活用教育の充実へ向け、環境整備に努めた。 ・組織的な授業改善を行うとともに、横浜中学校での実践を見学し、授業改善の一助とした。 ・全年次で「総合的な探究の時間」が実践された。オンラインなど多様な授業形態にも取り組んだ。	①コロナ禍にあって教育活動が制限される中でできることを考え、安全な授業展開を構築していく。新指導要領への移行も踏まえて、全体や、教科ごとの変更点や重要点を重視した研修を、引き続き開催していく。 ②次年度から「シチズンシップ教育」の研究指定校となる。「公共」の研究成果を継続し、さらに発展させていく。 ・Wi-Fi 環境が不安定で、オンラインが途絶えることが多い。	①新指導要領下の授業実践に期待する。新しい科目もあり、生徒も期待しているのではないか。 ・「１人１台パソコン」の時代になり、教員の ICT スキル向上がさらに求められるのではないか。コロナ禍の一過性ではないスキルアップが必要。 ②スクールポリシーにもあるが、「18 歳成人」を迎える中、「シチズンシップ教育」の充実が生徒の日常生活に反映されることを期待する。 ・環境整備とともに、教員の ICT スキル向上がさらに求められるのではないか。	①研究開発Ｇの呼びかけで、新学習指導要領に則った単元指導計画を全教科・全職員で試作した。新たな評価観点での授業実践が求められる。 ・全教員がスムーズにオンライン授業を行うスキルを身に付けた。 ・「公共」の研究は、教科単体になりがちであった。「シチズンシップ教育」研究母体の組織化が大きな課題となる。 ②ICT 利活用の環境整備が進んだが、実際の授業時における活用事例を増やしていく必要がある。 ・全学年での「総合的な探究の時間」計画が出そろったが、コロナ禍であったため完全実施ができていない。	①学年進行で順次、新学習指導要領・「１人１台パソコン」体制が整う。実践を積み重ねさらなる改善に取り組んでいく。 ②「シチズンシップ教育」について、研究開発グループが起点となり、教科任せにならない、全校的な研究組織を作っていく。 ・ICT 活用状況調査を実施し、活用方法などについても研究・検証していく。Wi-Fi 環境については、県の予算のほか、本校独自予算も活用して、アクセスポイント増設を図る。 ・コロナ禍で途絶えている公開授業研究や「総合的な探求の時間」の完全実施を通じて検証・改善していく。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	①安全・安心な学校生活を保障するとともに、すべての教育活動を「支援」の観点に基づいて検証・改善していく。 ②生徒の自己表現・自己実現の機会を充実させ、協働と成功体験の積み重ねによる豊かな人間性を育む。	①適切・迅速な初期対応の徹底、および「予防」的見地からの生徒対応の充実を図るとともに、感染症予防の定着を図り、安全・安心な学校生活を保障する。 ②自主運営能力の向上を基本とした行事・部活動の充実、対外的発表機会の拡充、地域交流・地域貢献事業の発展、等。あわせて、感染症予防の意識向上を、生徒活動の諸機会をとらえて徹底する。	①改訂された生活指導ハンドブックの定着と検証、特定時期における特定課題の研修会の実施による「予防」的生徒対応の充実、相談業務の充実、感染症予防の徹底、等。 ②昨年度中断した諸行事や部活動勧誘事業の再建・再編を通じて、生徒を中心とした運営機会を設定する。活動報告等の多様な情報発信、等に取り組む。感染症予防に意を払った行事運営を行う。	①生活指導ハンドブックにもとづく生徒対応が定着したか。また時宜にかなった研修機会を設定できたか。 ②生徒主体で行事を円滑に実施できたか、生徒の活動の様子を定期的に発信できたか、感染症予防の取組が行えたか。	①生活指導ハンドブックに関して、明確な指針を示すことができた。 ・経験５年目までの教員を対象に、生徒指導に関する研修を行い、様々な問題・悩み等を共有することができた。 ・感染症対策については、県教委からの指針に対して、迅速かつ的確に対応の方向性を示すことができた。 ②昨年度実施できなかった体育祭を今年度は縮小・変更開催、文化祭は中止したが代替行事を開催等、生徒の活動による自主運営能力の向上機会を設定できた。 ・部活動も多くの制限下、感染対策を徹底しながら取り組んでいる。体験等の勧誘事業ができないため、ホームページの充実などを通じて、情報を発信し、部活動の充実を目指している。	①生活指導ハンドブックを適用する中で顕在化する課題について改善していく。 ・多様化する生徒指導案件に対しては、指導と支援のバランスについて、今後も様々な視点から考えていく。 ・研修については、今後も継続したい。 ・感染症対策については、今後も適切に対応するとともに、コロナ禍における生徒の心的ストレスについても、慎重かつ丁寧な対応を心がけていく。 ②部活動勧誘事業の再建、対外的発表機会の拡充や地域交流事業の在り方が課題。 ・生徒自身で考え実行することで自主運営能力を育んでいくためにも、様々な制限の中、生徒会行事と感染対策を両立させていく。	①「指導と支援のバランス」は今後とも追求していってほしい。 ・経験年数の浅い教員対象の研修会は有益。 ・経験豊富な教員の中に、硬直した生徒指導観を持つ教員はいないか。「ブラック校則」問題など、ゼロトレランス的な発想からの脱却が求められている。 ・感染症対策の指導には、家庭の理解・協力が大切。 ②コロナ禍での取り組み、お疲れ様です。 ・コロナ後を見据えた場合、単純に「復活」でなく、コロナ期に実施できなかった内容を思い切って削減する等、負担軽減も必要ではないか。	①生活指導ハンドブックに基づく指導体制は定着し、服装規定等必要箇所の改訂を行った。 ・服装・身だしなみ・日常生活マナー・コロナ対応の感染症予防策・対人関係等、生徒自身が考えて行動できるよう、指導を継続している。 ・いくつかの事案について、一貫性のある指導を行うとともに、個々の課題に応じた支援策を、学年を交えて討議し、生徒を支える体制を作ることができた。 ②制約下にあってもいくつかの行事を実現することで、生徒自身の思考力・自主的運営能力を高めることができた。 ・各部活作成の動画を配信するなど、広く生徒にアピールする機会を設け、制約下における部活動活性化に向け取り組んでいる。	①ハンドブック記載の明確な基準に基づく指導を確立するとともに、定型化できない新たな事案について、今後とも柔軟かつ毅然とした指導・支援を継続していく必要がある。 ・教員の入れ替わりが激しく、また若い職場でもあるので、今後とも研修機会を設け、生徒対応のスキルアップを図っていくことは大切である。 ②変則的なコロナ対応も、ある程度予測可能な範囲に収まってきたかと思われる。 ・行事の公開、部活動体験会の復活等、少しずつ「正常化」の道を歩んでいると思われる。一方、コロナ禍の制約で始まったオンライン活用の勧誘・宣伝方法等も活用し、単純な「回帰」ではない、発展した活動を目指していく。

	視点	４年間の目標 （令和　年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	（３月 10 日実施）	成果と課題	改善方策等
３	進路指導・支援	①「キャリア教育」の視点に基づいた進路支援とカリキュラムマネジメントに取り組む。 ②系統的な進路支援体制の構築とともに、個別支援を充実させ、一人ひとりのニーズにかなった進路実現を目指す。	①キャリア教育実践プログラムの定着を図る。キャリア視点での新教育課程への提言を行う。 ②中学からのキャリアパスポートの引継ぎを行い、一人ひとりの進路実現に向けた計画的な学習を支援する。	①インターンシップ・「仕事の学び場」等、主体的な活動の充実。進路希望別の科目選択モデルパターンの提示。 ②スタディプログラムやキャリアパスポートの有効活用、「総合的な探究の時間」を通じての個人目標の設定等。	①主体的な活動の場を設定できたか。進路希望に叶う新教育課程を構築できたか。 ②情報を収集し、生徒に発信できたか。	①進路希望調査をもとに、多様な入試選抜ごとのガイダンスや指導を充実させた。外部プログラムの見直しを行い、スタディサプリの導入を決めた。 ・希望の進路に合わせた外部模試を活用し、個人の学力把握と目標設定を促した。 ②キャリアパスポートの引継ぎを推進、中学校から連続したキャリア支援体制構築に着手した。 ・スタディプログラムが今後終了することに伴い、全教科に問いかけて次年度以降の外部プログラム選定を行った。	①「指定校」ねらいの現状を改革し、生徒の進路意識を高めていく必要がある。新規導入したスタディサプリ活用の機会を広げていく必要がある。 ・コロナ禍の制約もあってか、一般募集生徒のインターンシップ実績はゼロであった。 ②キャリアパスポートのデジタルファイル化を進め、有効活用する機会を増やしていく。 ・新たな外部プログラムを、教科の協力のもと、計画的・継続的な学習支援・進路支援に繋げていく。	①コロナ禍でさまざまな制約がある中、オンライン等も併用して、丁寧な進路面談が実施された。 ②小・中・高、12 年間一貫指導を実現するためにも、「キャリアパスポート」の引継ぎ・活用は重要。 ・「高校の出口指導」という観点ではなく、生涯にわたるキャリア意識の醸成につなげてほしい。	①スタディサプリの導入等、有効な外部プログラムの導入に道を開き、導入だけでなく、定着・活用につなげられるか、次年度の大きな課題となる。 ・コロナ禍にあっても工夫して各種校内説明会を開催し、教員・生徒に有益な情報を提供した。 ・進路実績が乏しいため、希望する学校が出張説明会に応じてくれないなど、厳しい現実も迎えている。 ②キャリアパスポートの回収呼びかけを徹底した。外部プログラム活用については、新１年の協力が不可欠である。	①教科活動の中で外部プログラムを有効活用するなど、生徒が実際にプログラムにアクセスする機会を増やしていく。 ・インターンシップ等、体験的なプログラムも積極的に参加するよう、働きかけていく。 ②キャリアパスポートの電子データ化にも着手していくことで、有効活用の機会を創出する。 ・新入生の入学前課題をスタディサプリから出題することで、外部プログラム活用定着と、家庭学習の習慣化を図っていく。
４	地域等との協働	①地域・保護者への情報提供を充実させ、学校運営協議会を通じた協働的・双方向的な学校づくりを推進する。 ②地域への貢献と、地域資源の活用を両立させ、地域とともに育ち、地域とともに伸びる学校を目指す。	①広報活動の充実と、学校運営協議会を通じた双方向的な学校づくりを推進する。 ②地域への貢献と、地域資源の活用を両立させ、地域とともに育つ学校を目指す。	①各種メディアを通じての情報発信の充実を行うとともに、学校運営協議会の活性化を図る。 ②地域貢献デーの実施、DIG 研修等での地域協働、地元企業でのインターンシップ等、地域での体験的な活動を充実させる。	①情報発信の充実・学校運営協議会の活性化を図ることができたか。 ②地域との協働的・体験的な活動を充実させることができたか。	①学校のホームページの充実化を検討し、コロナ禍でも学校の状況がわかりやすいよう写真や動画を制作して更新の頻度を上げ、学校の様子が伝わるよう活動している。 　学校運営協議会で意見交換を行い双方向的な学校づくりを推進する。 ②地域との協働について、コロナ禍の制約はありながらも、いくつかの事業を実施できた。 ・連携生徒については、神奈川法人会と連携し、地元企業でのインターンシップ等、地域での体験的な活動を充実させた。	①学校の様子等ホームページ更新を充実させ様子が伝わるよう今後も検討していく。 ・コロナ禍にあり、学校運営協議会の対面開催が困難な状況がここ２年間、続いている。 ②地域との連携事業について、感染症対策に留意した活動などを模索していく。一部、地域との協働的・体験的な活動を充実させることができたが、コロナ禍、厳しい状況にあるため満足な実施とはなっていない。	①ホームページ充実してほしい。 ・中学生が学校訪問できる機会が少ない分、ホームページの充実を期待する。 ・学校運営協議会はオンラインや書面も併用した形で継続開催してほしい。 ②コロナ禍、様々な制約を越えての努力、ご苦労様です。 ・コロナが落ち着いたら、地域としても協力していきたい。 ・次年度、オンライン講習会等のコラボを期待する。	①学校説明会のオンライン開催等、コロナ制約下にあっても広報活動を充実させることができた。 一方、集合開催のノウハウが途絶えていることが課題である。 ・ホームページの充実には継続的に取り組む必要がある。 ②防災講演会は横浜市神奈川区役所から地域の防災情報などTeams を活用し各教室で講演会を実施した。学習会（DIG）では生徒同士が地域の避難場所を地図で確認し合う学習が行なわれた。	①集合開催のノウハウを適切に引継ぎ、「コロナ後」の広報活動に備える。 ・同時に、コロナ禍で培われたオンライン工法のスキルもさらに高めていく。 ②コロナ禍で途絶えた「地域との協働事業」復活に向けて始動する。 ・オンラインも併用し、地域協働の機会を拡充していく。
５	学校管理 学校運営	①UDL の観点に基づいた検証を全教育活動について行い、すべての生徒にとって学びやすい環境を整えていく。 ②｢ｽｸﾗｯﾌﾟ＆ﾋﾞﾙﾄﾞ｣の観点で業務を見直し、｢働き方改革｣を新たな創造に結びつける。	①UDL の観点に基づいた授業づくり、環境づくりを行い、全ての生徒にとって学びやすい環境を整えていく。 ②日常業務の中で、省力化・効率化できる個所を見つけ、見直しを進める。	①ICT 機器の利活用推進や校内表示の充実による視覚的支援、授業進行のスタンダード化、自習環境の充実、等。 ②打合せ掲示板の活用、オンライン会議の推進、業務改善アンケートの実施等を通じて、業務の効率的運営に取り組む。	①UDL の観点に基づいた授業づくり・環境づくりが進展したか。 ②タイムマネジメントを確立し、余力を他の教育活動等に振り向けることができたか。	①オンライン授業の導入により各授業教室から Chromebook での配信 、ハイブリッド授業によるプロジェクター、スクリーンを加えた授業を導入した。 ②会議で積極的に ICT を活用し、会議時間の短縮、ライブ型での会議や掲示板での資料共有など業務の効率化を図りながら実施している。 ・朝の登校時刻を遅らせる「時差登校」を継続している。その結果生じた朝のすき間時間を、生徒情報共有などに有効活用できている。	①ICT を利用しやすい環境づくりと使用しなくなったものの物品管理を整理し、より良い学習環境をさらに構築していく。 ②業務内容と業務分担を確認し、働きやすい環境を整え、授業研究や施設利用を運用させ、教育活動の向上を目指す。 ・オンライン会議は今後とも推進していく。またチャット機能を活用しての事前討議を多用することで、会議時間の短縮を図る。	①視覚優位の子たちに、ICT 機器の活用は有効。 ・「１人１台パソコン」の導入に期待する。 ②コロナ禍で縮小した業務の中に不要なものはないか。単純再生でなく取捨選択することが「働き方改革」につながるのではないか。	①コロナ禍で培われたノウハウを的確に継承していく。 ・校内環境的には、Wi-Fi 環境の改善が急務である。 ②出張や外部の研修会も含め、資料の事前送信・オンライン開催が増え、移動時間の短縮が図られている。 ・校内的にもチャット機能を有効活用する場面が増えてきている。一方、短時間でも対面で討議をすることが有効な場面もあり、取捨選択が大切である。	①ICT 活用研修会を継続的に開催していく。 ・県予算・校内独自予算措置も含め、Wi-Fi 環境整備に尽力する。 ②今後ともオンライン化・チャット化を進め、日常的な討議を積み重ねる体制を定着させる反面、生徒対応等は対面での討議が重要である。 ・時差登校による朝のすき間時間が有効活用されているが、一方で放課後の生徒活動時間を確保することも大切である。